

岩本篤志著

『唐代の医薬書と敦煌文献』

角川学芸出版 二〇一五年三月刊
A5判 二八六頁 三、七八〇円

本書は、著者が博士學位取得論文に構成・内容面で大幅な変更を加えて「スリムになった」ものである。問題の所在や研究史、着眼点や分析方法を論じた導論、三部立て全十章からなる本論、部ごとに論証をまとめた結論という構成（結論の後に初出一覧、あとがき、索引、英文目次）で、主に敦煌文献と日本に伝わる写本の医薬書の分析を通じて、南北朝・隋唐時代における医事制度の淵源と展開について論証する。以下、各部各章の内容を簡潔に紹介したい。

第一部は北斉初代皇帝高洋の即位に決定的な影響を与えた南士・徐之才という人物を中心に据え、隋唐の医事制度と深く関わる北斉および北朝の制度を検討する。第1章で徐之才の高洋即位における影響力の淵源が徐氏一族の巫医的な知識・能力にあったことを示し、第2章では彼の著作である『薬対』および墓誌の分析を通じて歴官と医術を考察し、隋唐の医事制度の基盤形成の端緒が北魏孝文帝・宣帝期の医事制度にあつ

たことを明らかにする。そして第3章では『薬対』に再び視点を移し、『史記正義』・『史記索隱』所引『薬対』佚文と敦煌本および吐魯番本の『本草集注』を用い、南北朝から隋唐にかけて医薬書が必ずしも確実なかたちで伝わっていなかった実情を明らかにする。

第二部は敦煌本『新修本草』の分析を基に、唐代に本草書が勅撰された意義とその背景、および当該書の敦煌における意義や地方社会との関係を論じる。第4章ではまず武田科學振興財団・杏雨書藏「敦煌秘笈」一本を中心に『新修本草』の序例について分析し、そこには皇帝が医方の妙極を尽くして臣民の生命を拯うという理念と四方からもたらされる貢物を王庭にみたくす「庭実」の理念とが示されていることを明らかにし、書き加えられた段落や書写された時期・場所なども考察する。第5章では『新修本草』の編纂者について検討し、天聖令の中の医疾令の考証を通じて、本草書が唐朝の薬材収集にあつて太常寺太医署が尚書省戸部度支に対して採葉申請をおこなう際の採葉マニュアルであること、『新修本草』が「庭実」の具現化たる貢獻制度確立に最も重要な典籍として認識されたために勅撰とされたことなどを指摘する。第6章は敦煌本『新修本草』の料紙や字体の比較、一次・二次利用面の再検討から、敦煌には当該書が少なくとも四種存在していたと推定し、『新修本草』の成立・配備という歴史的流れの中で敦煌でP三七一四が書写された背景やその過程を具

体的に浮かび上がらせる。

第7章では貝葉形『新修本草』抜抄（P三八二二）の装丁と内容を分析し、当該資料が吐蕃占領後期以降に敦煌某寺の僧によって書写された可能性が高く、農業と医業に携わった敦煌金剛明寺の索法律という僧が称賛された九世紀頃の背景を反映しているとする。また抜き書きされた薬材（植物）の種類から、その目的が本草書本来の医療活動ではなく、寺田に植え付ける蔬菜類を選別するためであった可能性を指摘し、『新修本草』が敦煌でどのように用いられていたのかを具体的に描き出す。最後に第8章として第二部の主たる資料である現存する敦煌本『新修本草』残巻の全釈文（第4章で既出の序例部分を除く）・校補を掲げる。

第三部は敦煌文献と日本古写本との補完的な関係に着目し、日本に所蔵される占術文献に第二部で用いた敦煌文献の分析方法を適用し、今後の敦煌文献研究の展望を示す。第9章では市立米沢図書館などに所蔵される『靈棋経』の日本伝存鈔本三点と敦煌出土残巻六点、道蔵本との対比・分析を通じて、日本鈔本が二系統に分かれること、『靈棋経』の成立や中国での流通、日本での扱われ方などを論じる。第10章では露・独に所蔵される吐魯番文献の調査による釈文作成と分析により、敦煌吐魯番「発病書」（占病類）二十三件を認知し、それらと敦煌に設置された占卜に関わる「州学陰陽」などの地方機関との関係性を推定する。さらに安部晴明撰『占事略決』占

病崇法は「発病書」と酷似し、占法原理だけでなく、神靈による世界観についても中国からの影響が見えたと指摘する。

本書の最大の特徴は、出土資料である敦煌文献の精緻な分析から文献成立の背景や書写者、読者（使用者）など文献を取り巻く様々な情景を具体的に描き出す過程にあると思われる。例えば、抜き書きされた薬材（植物）の排列から書写者の視線や動きを再現したり（第7章）、料紙の質や背面に書かれた本草とは全く別の内容から書写された場所や時期などを絞り込んだりするところは（第4章・第6章）特に鮮やかに感じられる。また伝写や引用の過程で削除・省略された箇所からも重要な情報を引き出す点や、筆者の「写本はしばしば、書写者の解釈や理解を含めて後世に伝えられる。いつも撰者の意図通りのテキストとして次世代に伝えられたとは限らない」（八八頁）という指摘には、同じような出土資料を研究する者として、ややもすると書かれている文字面にばかり目を奪われ、伝世文献との比較対照に意識が陥りがちな姿勢を改めて省みずにはいられない。本書が取り扱う分野は失礼ながら歴史学の中でけしてメジャーとは言えないが、原「資料」に真摯に向き合い、それを如何にして歴史学の「史料」に昇華させるのか、またそこから当時の社会を描き出すのか、時代や分野を限らず参考になることが多くあると思われるので、中国史研究に携わる多くの人に一読をお薦めしたい。

（森 和・成城大学民俗学研究所研究員）